

## 2026年5月10日放送・NPO法人・グラウンドワーク三島による地域資源を活用した災害復興支援活動

NPO活動サマリー

### NPOグラウンドワーク三島：地域資源を「癒しの力」に変える復興支援

源兵衛川の環境保全から被災者の心のケアまで、地域に根差した再生の物語

<p>支援活動総額</p> <h1>2,500万円</h1> <p>能登半島地震等の被災者支援金統計</p>	<p>三島招待者数</p> <h1>300人以上</h1> <p>2泊3日の行程で珠洲市等から招待</p>	<p>☆ 自然がもたらした奇跡</p> <p>「被災後1ヶ月間言葉が失っていた中学生が、三島の水に触れた後、自話し始めた。」</p>
--	---	--

#### 地域に根差した環境保全

源兵衛川再生

- ホタル生息環境の整備  
10回以上の草刈りを実施。クモの巣を防ぎ生存率を向上させる。
- 大規模な竹林伐採  
10年以上放置された「中之島」を整備。日照と風通しを改善。

竹の搬出作業データ

### 4日間

延べ10時間の業務

当初予定の「半日」を大幅に超過

#### 支援の哲学：癒しの資源

富士山の圧倒的プレゼンス

「見るだけで元気が湧く」日本の象徴を体験。

「再生の物語」を共有

汚れた川を市民が直した実体験が、故郷復興の希望のモデルとなる。

♡ 議論より、まず行動。

#### 被災者支援プログラムの流れ

- 心の解凍（バス移動700km）  
ストレスケアトレーナーが同行。読み聞かせ等で「客」から「仲間」へ。
- 感情の解放（夜の車座）  
お酒を酌み交わし、本音で「怒り、悲しむ」ための安全な場所を提供。
- 本来の自分へ（水遊び体験）  
避難所での「いい子」から、無邪気な子供へと戻る貴重な2時間。

#### アクションアイテム

Speaker 1

- 台湾のテレサ・テンの墓を訪問、後日報告

Speaker 3

🕒 5月17日 放送時間変更  
特別番組のため 午後2時から放送

本稿は、ボイスキューのラジオ番組「グラウンドワーク三島・アクショントーク」での対話に基づき、NPO法人グラウンドワーク三島の活動を紹介したものである。

前半では、源兵衛川のホタル生息環境を守るための継続的な草刈りや大規模な竹林伐採といった環境保全活動を紹介する。後半では、そうして再生された富士山や源兵衛川といった三島の自然を「心の癒し資源」として活用し、東日本大震災や能登半島地震の被災者を招待して行う、ユニークな手法を用いた「心のケアプログラム」とその顕著な成果について掘り下げる。

### 地域に根差した環境保全活動：源兵衛川の再生とホタル保護

NPO法人グラウンドワーク三島は、地域住民と共に源兵衛川の環境保全に継続的に取り組んでいる。放送日である5月10日は「河川一斉清掃」の日であり、朝8時半から多くの人々が川の清掃活動に参加した。

この時期、源兵衛川では、約1週間前からホタルが姿を見せ始め、現在10匹ほどが確認されている。グラウンドワーク三島は、ホタルを持ち帰ることなく、静かに鑑賞するルール遵守を呼びかけている。

ホタルの保護活動は、川の清掃だけに留まらない。特に冬場には、メンバーが外来種であるアシやヨシ、ジュズダマといった背の高い外来種の草を刈り取り、在来種の草の生育を促している。

この草刈りは、飛ぶホタルがクモの巣に捕食されるのを防ぐという重要な目的を持つ。背の高い草がなくなれば、クモは巣を張れなくなり、ホタルの生存率が向上するためだ。このようなホタルの保護や環境改善活動は、昨年从今年にかけて **10** 回以上実施している。

さらに、水の苑緑地の上流にある「中之島」と呼ばれるエリアでは、**10** 年以上にわたり繁茂していた竹林の大規模な伐採を行った。高さ **20~30m** にも及ぶ竹が密集し、日照や風通しを妨げ、住環境を悪化させていたため、**2** 日間かけて専門業者に伐採を依頼。しかし、その後の竹の搬出作業は当初の見込み（半日）を大幅に超えて、実際には **4** 日間、延べ **20** 時間を要する大変な作業となった。

この努力の結果、その場所が、光と風が通る爽やかな空間へと生まれ変わっている。これらの活動は、川は「みんなで作るもの」という理念に基づいた、半年以上にわたる地道な努力の賜物である。

## 被災者支援プログラムの全体像と手法

NPO 法人グラウンドワーク三島は、**3** 年前から能登半島地震の被災者支援活動に取り組んできている。これまでに総額約 **2500** 万円の資金をもとに、珠洲市と能登街を中心とした被災者約 **300** 人以上を、三島・富士山・伊豆に **2** 泊 **3** 日で招待した。

片道 **700km**、**9** 時間にも及ぶバス移動では、当初、参加者は心に深い傷を負い、家族間でも会話が少なく重い空気が漂う。

そこで、ストレスケアトレーナーでもある「メンボウ君」らが同乗し、巧みなコーディネートで参加者の心を解きほぐす。絵本の読み聞かせや、団体の活動を紹介するビデオ（**20** 年前の「ジャンボさん」が登場）を流すことで、参加者との間に親近感と仲間意識を醸成する。三島に到着する頃には、参加者は「招待された客」ではなく「仲間」としてジャンボさんと呼び捨てで、呼ぶほどに心を開いている。

被災者たちはふるさとの復興への道を模索してはいるが、「頑張れ」という言葉はかえって重荷になる。そこでジャンボさんは、「議論よりアクション」だと語りかけ、具体的な活動を提示する。

滞在先では、夜の交流会が重要な役割を果たす。大道芸などのパフォーマンスの後、大人たちは、ジャンボさんと車座になって語り合う。お銚子が **64** 本も空になるほどの賑やかな酒席となり、参加者は普段は胸に秘めている苦しみや悲しみを吐き出す。

これは、故郷のしがらみから離れた心許せる、安心できる環境と、ジャンボさんの「遠慮無く、怒り狂え」といった型破りな励ましが、感情の解放を促すためである。この一連の流れは、被災者が、心の重荷を下ろすために緻密に演出されている。

## 「心の癒し資源」としての三島の自然とその効果

支援プログラムの2日目は、三島の豊かな自然を体験する時間が設けられており、これが参加者の「心のケア・回復」に絶大な効果を発揮する。

特に、富士山の雄大な姿は、被災者たちに大きな感動と勇気を与える。天候が優れない日でも、不思議とバスが富士山に近づくと雲が晴れ、その荘厳な姿を現すという。普段テレビでしか見ることのない遠い存在の富士山を間近に見た参加者たちの表情は、一様に明るく変わる。

富士山の登山体験の後には、源兵衛川での水遊びが行われる。故郷で海には慣れ親しんでいても、これほど清らかで美しい川に入る経験は多くの参加者にとって初めてである。

子どもたちは唇が紫色になるのも構わず、2時間、3時間と夢中で水と戯れる。この無邪気な時間は、避難所生活で「いい子」でいることを強いられてきた子どもたちにとって、本来の自分を取り戻す貴重な機会となる。

これらの自然体験は、時に奇跡のような変化をもたらす。ある中学生は、被災後1ヶ月間言葉を失っていたが、このプログラムに参加し、富士山や源兵衛川に触れた後、夜の宴会で、自らジャンボさんに「ビール飲まない？」と話しかけた。

その姿を見た両親は、その場で号泣したという。三島の自然は単なる観光資源だけではなく、人の心に深く作用して、本来の自分と元気を取り戻すことができる、潜在的な力を持つ「心の癒し資源」である。

## 活動の核心：共感と「物語」がもたらす希望

一連の支援活動の根底には、人が人との関わりの中で癒され、回復するという哲学がある。お酒を飲みながら、本音を語り合う場は、心に沈んだ苦しみを浮き上がらせる。

そして、その吐き出された感情を、ジャンボさんやメンボウ君といった「いい加減」で「ナチュラル」な受け手がいるからこそ、参加者は安心してそれを乗り越え、心の強さに変えていくことができる。これは多くの苦しい話を聞いてきた経験値に裏打ちされた、説得力のあるアプローチである。

このプログラムの真価は、単に美しい自然を見せることにあるのではない。重要なのは、「かつて汚れていた川を、市民の力でここまで綺麗にした」という再生の「物語・知見」を共有することである。

この具体的な成功モデルは、自分たちの故郷をどう復興させればよいか分からずに模索している被災者たちに、実現可能な希望と行動のモデルを提示する。

ホテルが輝くのは、我々が過去に川を汚したことへの「償い」として環境を整えたからだ、という話から、テレサ・テンの『つぐない』へと繋ぐように、活動の全てが物語として語られる。

人を励まそうと意図するのではなく、ありのままに関わり、悩みを聞き、思いを伝える、その真摯な繋がりこそが、人を元気づけ、未来への希望を育む力になるとジャンボさんは力説する。